

竹屋に連れ行き男竹や女竹や様々な竹を見さしたの
で、精一君は始めて竹は非常に長くて幾種類でもあ
ることが判つたらしい。其内から直径六七分の竹一
本を買つて歸つた。今度は小鋸が欲しい、小刀が要る
と云ふことになつた。再び書生は刃物屋に精一君を
連れて行き適當な工具を買つた。こゝでも刃物屋に
は様々の刃物があることが判つたのでございます。
夫から、書生を相手に笛を作り始めたが、大凡二時
間もかゝて、やつとの事で、鶯の笛が出来上つた。
(勿論精一君には鶯笛の作れよう筈はない、幸ひ書生
が器用でしたから完成したのである)。

願ふに一の簡易なる物を作るにも材料の研究、工具の研究、製作品
の研究等之れが爲めに心身の活動は大したものであります。物體に
關する確かなる觀念や、工夫創始の諸能力も、大部分は製作によつて
收得されるものでございます。

殊に、玩具の如く、自作品が直に自分で玩ばれると云ふに至つては
之れより愉快なことは他にあるまいと思はれます。買つた魚より釣
つた魚が旨まいと云ふのも、無理からぬことです。近時教育上の新思
潮は、作業主義、藝術主義、自動主義、發表主義、實用主義等數へ來れ
ば十指を屈するも猶ほ足らざる次第でありますが、併し、是等の諸
説を實行貫徹せしめる先鋒は、子供の時から自分の最も好愛する玩
具を製作せしむるが最良法だと考へます。

○坊やはい子だ……

△お隣りに二人の子供が居ります。三つになる姉さんと、この六月
生れたばかりの弟と。このごろの暑い午後、時計がチーンと一時を
うつと、お隣りではれんれんよりの競争が始まります、といふのは
かうです。三つになる姉さんは、なか／＼活動家て晝寝が大きらひ、
朝おきるから、晩れるまで、お母さんの腰巾着、時々はお母さんか
らお小言を頂きながらも、せつせと活動してゐます。せめて午後の一
二時間をお母さんもおちつきたので姉さんの坊やをれかしつけ
ます。「坊やはい子だれんれしなあ、坊やのお守は何處行つた：：
海山こえて里へ行つた。：：里の土産何もらつた：：でん／＼太鼓
に笙の笛、坊やはい子だれんれしなあ……」。

れむくない姉さんの坊やは、なか／＼上下の眼蓋が仲よしになり
ません。とう／＼お母さんのこの口調をおぼえてしまひました。可愛
らしい赤い襟襟のお蒲團に横になつた姉さんは、やがて頓狂な聲を
はりあげて。「坊やはい：：れんれしなあ：よい子だ：でんでんだ
いこ：ちよりのふふ：：れんれしなあ……」。折角れてゐた弟の坊
やが、この聲にびつくりして目をさましてなき出す。女中がとんで來
て弟の坊やに「坊やはい子だれんれしなあ」とくりかへす。お母さ
んは姉さんの坊やの背をたゞきながら、

「本當に、れるんですつてば赤ちやんがおきてしまつたぢやあり
ませんか。困つた娘さんですれ。目をつぶるんですよ」と、また
「坊やはい子だ」とうたひ出す。

太陽はキラ／＼と照つて世界は眞晝、人は活動の眞最中、こゝでは
二人の坊やに二人の大人が「坊やはい子だ……」の競争で、母んさ
のソプラノと女中のバスと二重音になつて、それに大きい坊やの口
眞似と、小さい坊やの泣聲とがまざつて、なか／＼の賑やかさ。と
ても眠の國にはゆかれさうもないやうです。(九・八三〇)